

私立中高一貫校における中入生と高入生の比較分析

— 中学受験のメリット・デメリットの実証的検討 —

須藤 康介 (東京大学大学院)

1. 問題設定

本発表の目的は、私立中高一貫校における中入生（中学校から入学した生徒）と高入生（高校から入学した生徒）の意識・行動を比較し、中学受験のメリット・デメリットとされる事項を実証的に検討することである。

これまでの中学受験に関する研究は三つのタイプに分けられる。一つ目は、中高一貫校の制度やカリキュラムを明らかにする研究であり、樋田（1999）や油布・六島（2006）が挙げられる。二つ目は、どのような保護者・子どもが中学受験を選択するかに焦点を当てた研究であり、ベネッセ教育研究開発センター（2007）や片岡（2009）が挙げられる。そして三つ目は、中高一貫校に通う生徒の意識や行動の特徴を学校社会的に明らかにする研究である。ただし、このタイプの研究は蓄積が乏しく、中学受験による入学が子どもにどのような意識・行動をもたらしているのかは、ほとんど明らかにされていない。

本発表は、この三つ目の研究に位置づくものであり、同一調査対象校における中入生と高入生の比較分析を行う。中入生と高入生を比較することで、入試難易度や学校の教育方針を統制した、中学受験による入学の正味の効果に接近できると考えるためである。

分析に使用するデータは、東京大学教育学部が2006年度に実施した「首都圏の私立高校生の生活・意識・行動に関するアンケート」である。この調査は東京都の私立中高一貫校に通う高校2年生を母集団として実施されたものであり、学校タイプ（入試ランク、共学別学、大学附属かどうか）にできるだけ偏りが生じないように、対象校が選定された。

分析の際には、入試ランク（上位校・中位校・下位校）×共学別学（共学校・男子校・

女子校）の類型ごとの生徒数比率が母集団での比率に一致するように、ウェイト調整を行っている。入試ランクは、首都圏模試2006年結果偏差値を用い、在籍生徒数ができるだけ均等になるように、上位校・中位校・下位校を設定した。ただし、本発表は中入生と高入生の比較を目的とするため、高校入試による生徒募集を行っていない高校は分析から除外する。この除外によって、サンプルにおける上位校の数が少なくなるため、上位校と中位校をまとめて上・中位校として分析する。

2. リサーチクエスチョン

中学受験のメリット・デメリットを実証的に検討した学術研究は少ないが、一般言説レベルでは数多くのものが存在する。それらを検討した結果、次の三つのリサーチクエスチョンが導かれた。

RQ1: 「中入生のほうが学業適応が高い」か？

市販されている多くの『中学受験案内』においては、中学校から中高一貫校に入学していると、中高のカリキュラムの連続性や、中学校における発展学習や高校内容の先取り学習によって、高校生になったときの学業適応が高くなることが示唆されている。井上（2001）のように、その点を強調する論者も多い。しかし、高校受験がないことによって生徒に中だるみが生じているという指摘もある。はたして「中入生のほうが学業適応が高い」のだろうか。

RQ2: 「中入生のほうが学校生活が充実している」か？

やはり『中学受験案内』などでは、中学校から中高一貫校に入学していると、部活動な

どを継続的に続けられるため、また価値観が近い同級生と時間をかけて交友を深められるため、高校生活が充実しやすくなるとされている。しかし、裏を返せば、このような環境は、内藤（2001）が言うような、閉鎖的・硬直的で逃げ場のない交友関係が長期間継続することでもある。はたして「中入生のほうが学校生活が充実している」のだろうか。

RQ3：「中入生のほうが社会的不平等を感じていない」か？

中学生という発達段階は、自分の周辺だけの世界観から離脱し、社会がいかなるものかを認識し始める時期でもある。また、木原（1982）などが指摘するように、この時期は学校の同級生が「準拠集団」になることが多い。したがって、中高一貫校という生徒どうしの均質性が高く、さらに経済的・文化的に恵まれている集団の中にいることで、社会の不平等などに無自覚になるということがあるかもしれない。はたして「中入生のほうが社会的不平等を感じていない」のだろうか。

3. 分析結果

RQ1 に対応し、校内成績（5段階）を従属変数とした重回帰分析を行った結果が表1である。また、RQ2 に対応し、「学校生活に満足している」ダミーを従属変数としたロジスティック回帰分析を行った結果が表2である。そして、RQ3 に対応し、「現代の日本は、お金持ちと貧しい人の差が大きい」ダミーを従属変数としたロジスティック回帰分析を行った結果が表3である。

表1 校内成績の規定要因(重回帰分析)

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	標準化係数	有意確率	回帰係数	標準化係数	有意確率
女子ダミー	0.037	0.016		0.103	0.044	
きょうだい数	-0.043	-0.028		-0.083	-0.059	*
文化資本スコア	0.022	0.019		0.086	0.070	*
附属校ダミー	-0.004	-0.002		-0.239	-0.100	**
中入生ダミー(定数)	-0.198	-0.084	*	-0.003	-0.001	
	2.934		***	2.947		***
決定係数	0.008			0.017		
回帰のF検定	p=0.197			p=0.002		
有効度数	971			1165		

(*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表2 「学校生活に満足」の規定要因(ロジスティック回帰分析)

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	0.017	1.017		0.659	1.932	*
きょうだい数	-0.183	0.832		-0.017	0.983	
文化資本スコア	0.123	1.131		-0.015	0.985	
附属校ダミー	-0.036	0.965		-0.026	0.974	
中入生ダミー(定数)	0.331	1.393	*	-0.230	0.794	
	0.859		***	0.435		**
Nagelkerke係数	0.018			0.036		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.025			p=0.000		
有効度数	981			1166		

(*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表3 「貧富の差大きい」の規定要因(ロジスティック回帰分析)

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	-0.076	0.927		-0.253	0.776	
きょうだい数	0.162	1.176		-0.086	0.918	
文化資本スコア	0.105	1.110		-0.085	0.918	
附属校ダミー	-0.022	0.978		0.043	1.044	
中入生ダミー(定数)	-0.039	0.961		-0.101	0.904	
	0.904		***	1.631		**
Nagelkerke係数	0.007			0.008		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.411			p=0.293		
有効度数	978			1164		

(*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

4. 考察と結論

以上の分析から得られた主な知見は三点である。第一に、上・中位校において、中入生は校内成績がやや低くなっている。高入生は高校受験によって比較的近い時期に選抜されたため、落ちこぼれがまだ発生していないのに対して、中入生は中学時にハイペースな学習についていけなくなっている生徒が一定数存在するためと考えられる。

第二に、上・中位校において、中入生は高入生よりも学校生活に満足している。中入生は、部活動や対教師関係において、学校生活への適応に一日の長があるのだろう。下位校においては、高入生の比率が高いこともあつてか、中入生と高入生で、学校生活の満足度に明確な差は見られない。

第三に、中入生は社会的不平等を感じていないという傾向は見出されなかった。しばしば指摘されるような、私立中学校への進学によって社会認識に偏りが生じるといったことは、本分析からは支持されない。

本発表で分析した中学受験のメリット・デメリットは、学校生活のごく一側面にすぎない。今後、より広範な分析が求められる。

(引用文献は当日に示す)